

秋川は、美しい渓谷や人と生き物で賑やかな河川というイメージがあります。本来、河原は公共の場であり、人と生き物が共存すべき環境でもあります。でもそうはいかないようですね。秋川には様々な魚がいるので釣りに訪れる人が多く、その魚を守るため、魚類の放流やカワウ対策による人工物が設置されている状況に以前からいろいろと気になっていました。かつては、^{モじょう}遡上アユも多く、サギ類やカワウなどもほとんどいなかったため、これらの対策は不要でしたが、現在、サギ類やカワウなどは急激に増加してしまいました。この増加は、人間活動に限らず、自然界にも影響を及ぼすため、コントロールが必要になると思いますが、秋川でよく見られるようになった防鳥用テグスやビニール、^{たこ}凧などの「支障物」や水中の釣り針による捕獲法などは、目的の鳥に限らず、他の水辺環境の野鳥に影響が出てしまうことが懸念されます。

東京都で貴重な野鳥であり、渓谷の豊かな自然の代表的な生き物であるヤマセミやアカショウビン（どちらも絶滅危惧種）は、近年滅多に見られなくなりました。また、昨年12月には、カルガモがテグスに絡まってしまった事例がありました。目に見えない影響は他にもあると思われ。ちなみに、急降下できるサギ類やカワウは、支障物の存在に慣れて河原に普通に着地するため、魚類の捕食



多くの野鳥への影響も伴う秋川のテグス景色

抑制は難しい印象です。一方、カモ類や特にヤマセミ、アカショウビン、カワガラスなどの野鳥は、よく水面に沿って飛ぶため、その影響を受けやすいことが想定されます。

市にカワウのコロニー（集団営巣地）は存在しませんが、日本各地の水辺環境の改善や河川敷などの樹林化に伴い、全国的にコロニーの増加がみられ、カワウによる被害が拡大してしまいました。全国レベルの連携によるコロニー（またはねぐら）のコントロールを行わない限り、カワウなどの被害が収まることは期待できません。生物多様性を目指す市として、清流秋川にすむ魚や水辺環境を好む野鳥を守る対策がないものかと頭を悩ませます。

自然を愛する市民や観光客をがっかりさせない「多様で美しい秋川の姿」の復活を心から願います。

（パブロ）